

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：12701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2013

課題番号：23653058

研究課題名(和文)英国自然神学の解体と科学的経済学の確立：ダーウィニズムの社会科学的インパクト

研究課題名(英文)The Decline of the British Natural Theology and the Establishment of Economic Science: Social Scientific Impact of Darwinism

研究代表者

有江 大介 (ARIE, Daisuke)

横浜国立大学・国際社会科学研究院・教授

研究者番号：40175980

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：平成23年度は「ヴィクトリア時代思想セミナー」という連続研究集会を開催。24年度にその成果を研究代表者の編著『ヴィクトリア時代の思潮とJ.S.ミル』(三和書籍、2013年)として刊行し、第12回国際功利主義学会ニューヨーク大会(24年8月)にて“Leslie Stephen's Agnosticism”なる報告を行った。25年度には、神の認識と経験論と蓋然性論との関連につき検討し研究集会「思想史におけるJ.バトラー」(26年2月8日)を開催した。

研究成果の概要(英文)：I held the consecutive study meetings called "the Victorian Current Ideas Seminar" in 2011. In 2012, I published its research result as the editor and a writer in the title of The Thoughts of the Victorian Era and John Stuart Mill: Literary Arts, Religion, Ethics, and Economy (Tokyo: Sanwa Books, 2013). I also read a paper titled "Leslie Stephen's Agnosticism" in the 12th conference of the International Society for the Utilitarian Studies (New York, 24 August, 2012). In 2013, I focused on the research about the recognition of God in association with empiricism and probability theory from the view point of the Darwinian methodology and the view of society. I eventually hold a workshop on "Joseph Butler in the History of British Ideas: Probability from Butler to Keynes" (February 8, 2014), and I am preparing the publication of its result now. As a whole, I am convinced that my research had the significance as the pilot-like trial to fill the omission of the study of the field in Japan.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学 経済学説・経済思想

キーワード：神学 ダーウィニズム 社会科学方法論 キリスト教経済学 ヴィクトリア時代 経済思想史 ジョセフ・バトラー

1. 研究開始当初の背景

1990年代の英語圏の経済学史研究では、ボイド・ヒルトン (Boid Hilton) やウォーターマン (J.C.A. Watermann) らの研究によって、19世紀における「キリスト教経済学」(Christian Political Economy) なる概念が提示され、この潮流こそが当時の経済学の主流であるとの主張がなされた。経済思想史の学界に波紋を投げかけたこの提起は、わが国でも、深貝保則 (「神学的経済学の商業社会把握: マルサス、チャーマーズ、ホエイトリ」、『マルサス学会年報』第6号、1996年)、柳沢哲哉 (「J.B. サムナーとマルサス」、中矢俊博・柳田芳伸編著『マルサス派の経済学者達』、2000年) らによって、マルサス以外の“忘れられた”経済学者達の業績の検討を通じて肯定的に受け止められているかに見える。しかし、こうしたいわば「キリスト教経済学」テーゼとその受容のあり方には幾つかの問題点が存在した。

第一に、経済思想史では無視されがちであった、時代精神としての福音主義的な思潮の持った幅広い影響力に注意を促したのは確かである。しかし、時代の風潮や宗教的思惟の文化的役割に強く焦点が絞られることによって、逆に、背後にある18世紀以来強まったキリスト教護教論としての自然神学的な自然や社会の把握あり方それ自体の分析、系譜的位置、方法論的評価が不十分であった。ヴィクトリア時代における最大の知的事件と言われるニューマン (J.H. Newman) のイングランド国教会からローマ・カトリックへの改宗も、こうしたキリスト教と自然科学を中心とした新しい知識の普及のインパクトとの緊張関係抜きには理解できない。さらに、こうした過程で登場したダーウィニズムの影響も十分に考慮されているとは言いがたかった。

第二に、「キリスト教経済学」テーゼによって、確かに、経済的思潮の人文的・宗教的背景の理解は深まった一方で、新たな学問領域である経済学の理論形成との関連が必ずしも十分に示されない点も指摘しなければならない。すなわち、ヴィクトリア時代のもう一つの時代精神は、ダーウィニズムも新興科学たる経済学もその典型である“科学”であった (B. Dennis & D. Skilton, *Reform and Intellectual Debate in Victorian England*, London: Croom Helm, 1987) からである。言い換えれば、経済理論の持つ経験論や帰納法への方法論的配慮が欠けていては、「キリスト教経済学」とはいえ経済思想としての適切な評価は期待できない。結果として新古典派経済学の系譜を基軸にする経済理論史研究との対話が欠落するのも当然のことであった。

第三に、キリスト教徒が人口の1%に満たない我が国においては、以上のような課題設定はもちろん、そうした問題意識自体が形成されにくいという文化的・歴史的事情が存在

する。仮にキリスト教と科学に関する研究があったとしても、それはブリテン科学史、あるいはキリスト教研究の範囲に閉じ込められがちであり、本来必要な研究領域を横断する学際的な研究としてはほとんど示されてこなかったといえる。

こうした我が国の従来からの研究状況に一石を投じようとしたのが、本挑戦的萌芽研究であった。

2. 研究の目的

本研究は、以上のような当該課題に関する従来の研究状況と背景を踏まえ、わが国の社会科学史研究の分野で、スミスやマルサス研究などの一部の例外を除いて全くといってよいほど検討されることのなかった、神学と科学、とりわけ自然神学と社会科学的思惟の確立とが密接に関連していた点につき検討することを目的とした。

具体的には、第一に、19世紀中葉の英国において、ダーウィニズムが自然神学に最終的な打撃を与えたこととの意義を、新たな科学的知見の発展と超越者の存在という宗教的確信とがどのように調停・妥協されたのかという視点から方法的に明らかにすることを目的とした。18世紀以降の古典派の予定調和的経済観の解体を経て、経済現象の「科学的記述へと経済科学が変容した過程についてその相互関係とともに明らかにすることで、改めて、バトラーの蓋然性論やヒュームの帰納法批判などの系譜の中に19世紀の議論を位置づけることとなると推測した。

第二に、こうした自然神学的な宇宙観や社会観と表裏一体のものであった古典派経済学の予定調和的経済観が、飢饉や恐慌をはじめとした現実の経済過程の観察と分析を経て、どのように変容、解体していったのかを明らかにすることを目的とした。これは新たに生まれた political economist に、一方で社会全体の経済的厚生を向上させようという、スミス以来の経済学の「目的」を保ちつつ、他方で経済現象そのものの分析への関心が強まるといういわば“2正面作戦”を強いることになったことの経緯を再考することでもあった。19世紀を通じて、political economy が economics へと、転換する過程の再検討を意味する。その際、ダーウィニズムの反自然神学的特質の中核であった“適者生存”の“競争”のイメージがどのように経済学者たちの経済社会観や市場観に影響を与えたかも明らかにすることになると想定した。

第三に、時間的に可能ならば、振興科学として登場した経済学のどの側面に、あらたな“科学”としての相貌が刻印されることとなるのかを、対象の分析の方法という視点から明らかにすることも本研究の目的とした。“富の理論”(plutology) から“交換の科学”(science of exchange) へと特徴付けられることもある上記の political economy から

economics への転換の過程を、古典派経済学（スミス・リカード・ミル）と経済社会観から限界革命（ジェヴォンズ・メンガー・ワルラス）以降との方法的差異が、果たしてどこまで認定しうるかの問題は残るが、ダーウィニズムの影響との関連において検討することになると意図した。

3. 研究の方法

本研究の具体的内容は、まず第一に、当該課題の 19 世紀およびそれに至る前史についての欧米の標準的な解釈や我が国の関連業績を再検証する。第二に、ペイリー以降の自然神学的社会観の展開とその経済学との内在的な関係を、科学方法論に即して跡づける。第三に、その上で、ダーウィン進化論の社会科学的内容とその方法論的影響を探求する、以上である。

これを遂行するための研究方法としては、研究代表者個人のみによって実施される人文・社会科学的研究となる。具体的には、文献資料探索、文献資料読解、学会・研究会への参加と報告、関連分野研究者との研究打ち合わせ、などによって構成された。

特に、 については、我が国での当該分野研究の今後の展開に資することを目的として、関連研究者を糾合しての連続研究集会を積極的に開催する。とりわけ、若手研究者のリクルート・発掘という側面においてこの試みは有効と考えた。

同じく、可能な限り、関連分野の国際学会への参加と報告を意図する。これは、当該分野の蓄積の乏しい我が国からの研究発信としての意義を持ったはずである。

4. 研究成果

本研究は、上述のように、わが国の社会科学史研究の分野で極めて不十分であった神学と科学、とりわけ自然神学と社会科学的思惟の確立とが密接に関連していた点の解明を目的とした。具体的には、19 世紀中葉以降の英国において、ダーウィニズムが自然神学に最終的な打撃を与えることになる知性史的な背景と、その社会科学的思惟への影響、特に経済現象の「科学」的記述へと経済科学が変容した過程について、その相互関係とともに明らかにする事を目指した。

平成 23 年度は補助金の給付期間中、東日本大震災によって研究計画に大きな影響を受けながらも、主として 19 世紀中葉、ヴィクトリア時代英国の宗教と科学との相互関係に研究を集中した。この課題を、研究分担者として関わった先行する科学研究費「基盤研究(C)」「J.S.ミルにおける自由と正義と宗教」(平成 20-22 年度)を引き継ぎ、「ヴィクトリア時代思想セミナー」という連続研究集会という形で遂行し、多くの関連分野研究者からの知識提供と討議を行った。また、第 11 回国際功利主義学会イタリア・ピサ大会(2011 年 6 月 23-25 日)において、ヴィクト

リア時代の不可知論に焦点を絞った "Victorian Agnosticism and Bentham's Dualistic Appraisal of Religion" と題する報告を行った。

以上の成果は、平成 24 年度末に研究代表者・有江大介の編著『ヴィクトリア時代の思潮と J.S.ミル：文芸・宗教・倫理・経済』(三和書籍、2013 年)としての刊行に至った。この中で、編者として「はじめに」と「第 4 章 J.H.ニューマンの知識論：ヴィクトリア時代の信仰と科学」を分担執筆した。この論文は、我が国ではほぼカトリック系の信仰を持つ研究者によってのみ言及されてきたニューマンについて、神学的にではなく帰納法や蓋然性論といった科学方法論的視点からの貴重な成果と自負している。なお、本書の合評会が日本経済学史学会関東部会によって開催され(於:東洋大学、平成 25 年 10 月 5 日)、日本ピューリタニズム学会の学会誌『日本ピューリタニズム研究』第 8 号(平成 26 年 3 月)に掲載された。併せて、研究の中間報告的の一端として、当該期知識人にとって重要課題であった神の存在に対する不可知論に焦点を絞った "Leslie Stephen's Agnosticism" と題する報告を第 12 回国際功利主義学会ニューヨーク大会(2012 年 8 月 8 日-11 日)に行った。

最終の平成 25 年度には、経済学的側面の検討と同時に、改めて原点に戻る意味で、現代に繋がるイギリス経験論における超越的存在の探求の意義について、現代の神の認識の問題と関連させながら 18 世紀のジョゼフ・バトラーの蓋然性論の系譜的検討を行った。これは、本科研費による「思想史おける J.バトラー」という研究集会(平成 26 年 2 月 8 日)に結実し、現在、その成果の出版に向けて準備中である。なお、この点に関連して、日本 18 世紀学会『学会ニュース』第 75 号(平成 26 年 4 月)に「研究動向：忘れられたイデオログ、バトラー主教：バトラー研究は興るか？」を掲載した。

以上、今般の「挑戦的萌芽研究」は、全体としてわが国の当該分野の研究の欠落を埋めるパイロット的な試みとしての意義を持ったと、私は自負している。

なお、本挑戦的萌芽研究の成果の上に、今後の発展方向として以下の研究課題が重要であると認識していることを付記しておきたい。それは「自然神学と創造論：アングロ・アメリカ的思惟の宗教的背景」である。

すなわち、この課題は、アメリカ人の 6 割以上が信じているといわれる創造論 (creationism) とその「科学的」表現である ID (インテリジェント・デザイン) 理論について、現代の反進化論のキリスト教原理主義という面ではなく、ニュートン主義や英国 18 世紀の理神論、アメリカ大陸に普及した 19 世紀初頭のペイリー自然神学などの思想的系譜の延長においてその特色、宗教的背

景、現代社会思想にとっての意義を明らかにするものである。領域は経済学から人文に変わるが、前年度に終了した本挑戦的萌芽研究の延長として、位置付くものと言える。

より具体的に説明すれば、以下のようになる。英語圏では、地球や人類の発生についての啓蒙期以降の新しい科学的知見の発見とその普及は、決してキリスト教信仰との対立と闘争を引き起こしはしなかった。むしろ、『聖書』の記述との整合性を保ち、信仰と科学とを巧みに調停する形で展開した。T. チャーマーズ『キリスト教の掲示の検証と権威』(1815)、サムナー『天地創造の記録』(1816)などは19世紀前半の典型的な“啓蒙書”である。自然神学の形式を借りて天文学や地質学などの自然科学的知見を普及する目的で刊行された『ブリッチウォーター論集』は19世紀中盤の大ベストセラーであった。こうした趨勢を支えたものが、終了した研究課題に関わるペイリー『自然神学』(1802)であったのは言うまでもなく、ダーウィン『進化論』(1859)の登場がこれに決定的打撃を与えたのである。英語圏では膨大な研究蓄積があるが、Charles Gillispie, *Genesis and Geology*, Harper Torch, 1951, Alister Hardy, *The Biology of God*, Taplinger, 1976, John Brooke, *Science and religion: Some Historical Perspectives*, Cambridge University Press, 1991, Francisco Ayala, 'Intelligent Design: Original Version', *Theology and Science* 1(1), 2003. などを挙げておこう。最後のAyalaはID理論の原型がペイリーにある事を示した論文である。ペイリー『自然神学』がアメリカ・プロテスタント社会の知識人に広範に普及したことが、現代につながるダーウィン進化論への強い抵抗力になったことは(E. J. Pfeifer, 'Darwinism in the United States', in T.F. Glick, ed. *Comparative Reception of Darwinism*, University of Texas Press, 1974)、現代の創造論とID理論の隆盛につながる一つの要因であろう(Neil Manson, ed. *God and Design: The Theological Argument and Modern Science*, Routledge, 2003, 2012)。

わが国の研究では、英国については重厚な松永俊男『ダーウィンの時代』名古屋大学出版会(1996)、自然神学については芦名定道『自然神学再考』晃洋書房(2007)、アメリカについては現代文化論的な鶴浦裕『進化論を拒む人々 現代カリフォルニアの創造論運動』以外、通俗科学の域を越えるものがない。なお、申請者は「自然神学の『幸福な世界』19世紀ブリテンにおける神学的経済社会把握」、『エコノミア』56(1)、2005、「クラーク=ライプニッツ論争(1715-16)の社会科学的含意 神論から自然・人間論へ」、『エコノミア』60(1)、2009、などでこの問題に社会科学的な視点から言及している。本研究は、その発展として主にアメリカに焦点を絞った思想史的研究を目指すことになる。

以上、我が国での当該分野の研究蓄積が薄いことを念頭に置いて、成果を踏まえた今後の方向を記した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

有江大介、忘れられたイデオログ、バトラー主教：バトラー研究は興るか？、日本18世紀学会「学会ニュース」、第75号、無、2014、4-6

有江大介、覚え書き：わが国のアダム・スミス研究の特色 水田洋氏の業績とAdam Smith's Library: A Catalogue (2001) から見て、東京大学経済学部資料室年報、第4巻、無、2014、16-24

ARIE, Daisuke, 'Confucianism', The Bloomsbury Encyclopedia of Utilitarianism, ed. James E. Crmmins, 無、New York/London/New Delhi/Sydney: Bloomsbury, 2013, 88-89

ARIE, Daisuke, Review, Tkeshi Sasaki and Hideo Tanaka eds., *Enlightenment and Society: Changing view of Civilizations, in Japanese*. Kyoto: Kyoto University Press, in *Eighteenth-Century Scotland*, No. 27, Spring, 無, 2013, 31-32

有江大介、<書評>川名雄一郎『社会体の生理学 J.S.ミルと商業社会の科学』京都大学学術出版会、2012、社会思想史研究、第37号、無、2013、205-209

有江大介、J.H.ニューマンの知識論：ヴィクトリア時代の信仰と科学、『ヴィクトリア時代の思潮と J.S.ミル - 文芸・宗教・倫理・経済 - 』三和書籍、無、2013、73-95

有江大介、<書評>中澤信彦『イギリス保守主義の政治経済学 - パークとマルサス』ミネルヴァ書房・2009年、社会思想史研究、第35巻、無、2011、173-177

[学会発表](計7件)

有江大介、バトラー蓋然性論の射程：宗教と科学、科学研究費ワークショップ「思想史におけるバトラー」、2014年2月8日、横浜国立大学

有江大介、わが国のアダム・スミス研究における水田洋氏の貢献と意義：同感・ノミナリズム・ライブラリー、東京大学経済学部資料室・科学研究費共催ワークショップ「スミスの経済学の理論および思想形成過程の実証的研究」、2014年2月1日、東京大学

ARIE, Daisuke, 'Leslie Stephen's Agnosticism: Victorian Faith and Science', The 12th Conference of The International Society for Utilitarian

Studies, 2012.8.23, New York University (USA)

ARIE, Daisuke, 'Is Capitalism a Satanic System?', The Xth International Milton Symposium, 2012.8.10, Aoyama Gakuin University (Japan)

有江大介、佐々木武・田中秀夫共編著『啓蒙と社会 - 文明観の変容』に欠けているもの、第36回社会思想史学会大会、2011.10.29、名古屋大学

有江大介、ヴィクトリア時代の金銭と幸福：幸せは金で買えるか、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第11回全国大会、2011.11.19、甲南大学

ARIE, Daisuke, 'Victorian Agnosticism and Bentham's Dualistic Appraisal of Religion', The 11th Conference of The International Society for Utilitarian Studies, 2011.6.22, University of Pisa (Italy)

〔図書〕(計2件)

有江大介・戒能通弘・深貝保則・高島和哉・小畑俊太郎・板井広明・安藤馨、ナカニシヤ出版、ジュレミー・ベンサム の挑戦、2014、350

有江大介編著、三和書籍、ヴィクトリア時代の思潮とJ.S.ミル - 文芸・宗教・倫理・経済 -、2013、250

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

有江 大介 (ARIE, Daisuke)

横浜国立大学・大学院国際社会科学研究所・教授

研究者番号：40175980